

エッセイ

唾液との関わり

北 進 一

楽器と唾液

笛やラッパなどの吹奏楽器の場合、吹き口（^{うたぐち}歌口）は唾液に触れるばかりか、吹く息の中の水蒸気が楽器に触れて冷やされ水分となる。そのため、長時間吹奏していると、両方の液が合流して楽器の管の内部を流れ、音質を悪くする。そこで、奏者は時々楽器を上下に振ったり、内部に布を通して、液を除去しなければならない。しかし歌口は適度の量の唾液でぬれている方がよいので、吹奏に先立って歌口をなめる光景を目にすることがある。

ハーモニカの場合は、息を吹くだけでなく、吸うことによってもリードを振動させる。従って、曲が終わるまで口にくわえ続けているため、唾液の影響は甚大である。不注意にも、食後すぐに口を洗わずに吹奏すると、食べかすが吹き口や内部のリードに付着し、音を狂わすと同時にきわめて不潔である。

三弦（三味線）という楽器に直接接触した経験はないが、意外なことに、三味線にも唾液との関係のあることを知った。三味線は演奏中にずれたり動いたりしないように、その胴をしっかりと固定しておく必要がある。そのためには、胴の下面にはゴム布を敷いて置き、胴の上面には胴掛け（表が布、裏は紙）と称するものを掛けて、木製である胴の滑りを防ぐ。この胴掛けの上面を、右腕の下面で押さえ込み、固定して弾く。この時に、押さえ込む右腕の下面、または胴掛けの腕で押さえ込まれる位置に、奏者は何気ないしぐさで、指先でなめた唾液を塗りつける。唾液の粘着性を利用するのだという。

さらに、三味線の胴皮には、^{ぼちかわ}撥皮というかまぼこに似た形の薄い皮がはり付けてある。弾くときに、弦をはじく撥の先が直接当たる所が撥皮であり、これによって高価で貴重な胴皮が破れないように、保護の役

目をする皮である。この撥皮をはがして新しい撥皮とはり替えるときに、また唾液を用いる。ガーゼまたは木綿の布に唾液をたっぷりと含ませ、それで撥皮の周辺部を何回もこする。唾液中には、各種の酵素が含まれているほかに、多種の微生物や細胞も存在しており、これらの微生物や細胞も各種の酵素をもっている。そこで撥皮の周辺から、このような諸酵素をしみ込ませて、撥皮を付着させている糊を溶かす、というのが唾液を用いる理由である。だから、水を使ったのでは効果がまったくない、のだという。

こうして唾液でこすっていると、撥皮がはがれ始めるので、はがれた周辺部を持って撥皮全体をはがし取る。除去部の胴皮の部分は、唾液を含ませたガーゼや布片で何回も拭いて糊の跡を完全に除去する。さらに新しい唾液で拭き、最後に水で拭いて乾燥させる。次いで、新しい撥皮を糊り付ける際に用いる糊であるが、これはもち米のめし粒をヘラでつぶして練ったもの、あるいは鶏卵の白身を使う。撥皮をはる胴皮の位置に、糊を薄くのばし、手早く撥皮を載せ、撥皮全体をしごいて、過剰な糊をはみ出させる。次いで新しい唾液をガーゼに含ませて、はみ出している糊を溶かして拭き去り、乾燥させる。

糊として用いたものが米の澱粉である場合は、唾液に含まれている澱粉分解酵素が、その糊の澱粉を分解して、粘りのない麦芽糖に変えるので、撥皮がはがれる。また糊が卵の白身の場合は、唾液に多数混入している細胞や微生物から出るタンパク質分解酵素が、その糊のタンパク質、殊に粘りの強いムコタンパク質を分解するので、撥皮ははがれる、ということであろうか。

私が10歳の誕生日に、父に買ってもらった竹製の横笛を長いこと愛用していた。これは^{みんてき}明笛と呼ばれるものであった。なぜそう呼ばれるのかのかについては、

何の関心も持たずにいたが、いい歳になった今、その名称の由来が分かったような気がする。

明笛には吹き穴が1個、指穴が6個あり、そのほかにもう1個のやや小さい穴があり、響き穴（響孔）と呼ばれる。響き穴の位置は、吹き穴と、吹き穴に最も近い指穴とのほぼ中間にあった。この響き穴には、竹紙というものを唾液でぬらしてはり付ける。こうして笛を吹くと、その竹紙が振動して音色に妙味を添えるのである。竹紙は竹の幹の中にある薄い紙のようなものであり、私の少年時代は、生薬屋（いまの漢方薬店）で売っていた。ということは、竹紙は薬として用いられていたものであり、収斂作用があるため、傷口に張り付けると絆創膏のような役割を持ったものらしい。

時期は定かではないが、1980年頃の夏、運転中の車のラジオで、中国の横笛の名人の演奏を聴き、驚いた。その音色は正に、少年の日に夢中になって吹いていた明笛とそっくりなのである。名人の用いた横笛は明笛ではなく、その名前は思い出せない。しかし演奏後の解説によれど、やはり響き穴があって、そこに竹紙を唾液で張り付けて奏するのだという。

私の愛用した横笛の明笛という名前の由来は、多分、中国の明の国（1368～1644年）の時代に生まれたもので、その名が伝来したものであろう、と推定している。

ヒル（蛭）の唾液

中学生時代のこと、級友に農家の息子がおり、親しくしていた。田植えの時期になると、猫の手も借りたくて、稲の田植えやその後の草とりの手伝いをせがまれた。現在ではどこでも田植え機によって、みるみる作業が進行するが、当時は裸足で田んぼに入り、すべてが手作業で苗を植えたので、知らぬ間に脚のすねや腕などにヒルが吸い付き、たっぷりと血を吸われてい

た。

ヒルの唾液腺（頰腺）にはヒルジン（hirudine）という物質があり、これをヒルの唾液の中に分泌して、人の傷口の血液が凝固するのを防ぐので、ヒルは多量の血液を吸うことができる。ヒルジンは、人の血液が凝固するのに必要なトロンビンの働きを、阻止する作用を持つ。一方、人の唾液には、血液中に存在する血液凝固に関与する因子、例えば組織トロンボプラスチン様物質が含まれており、これがトロンビンの形成を促して血液の凝固を速め、傷の出血を止める働きをするのであるが、ヒルの唾液は逆の作用をしている。

昔は、このヒルが医療ヒルとか血吸いヒルの名で、吸血療法に用いられていた。これはわが国では「水蛭」と呼ばれ、生きたままのもの、又は焼いて乾燥させたものが用いられた。生きたままの水蛭は、治療の目的で、患者の身体から血液の一部を抜き取るための、吸血療法（瀉血療法）に応用されている。ヒルによる瀉血、すなわち吸血療法は、浮腫・高血圧・脳出血・心不全などの際に応用されたいが、効果のほどはいかがであったものか。また、多数のヒルの唾液腺を集めてヒルジンを抽出し、乾燥・粉末とした製品もあり、これを生理的食塩水で溶かして、静脈血栓（静脈内で血液が固まること）を予防する目的で、静脈内に注入したり、さらには軟膏の形にして、皮膚の古傷の凝血を取り除くのに用いられている。

ヒルの学名は、ラテン語でヒルド（Hirudo）、英語名ではリーチ（leech）という。ヒルドもリーチも、古い時代には医者を意味していたようだ。これは前述の吸血療法にヒルを用いていたことによるからであろう。しかし、こんな皮肉なことわざもある。Leeches kill with license.（医者どもは免許を得て人を殺す）。ヒルのように人を食べ物にして、財を成していた悪徳医が、昔はいたらしい。

（旭川医科大学名誉教授）